

森と海のつながり体験講座 開催しました！



- 日時 令和4年5月28日（土）13：00～16：00
- 会場 ドングリランドビジターセンター（高松市西植田町）
- 講師 増田 拓朗 氏（香川大学名誉教授） ■協力 NPO法人どんぐりネットワーク

5月28日（土）に、ドングリランドビジターセンターにて、森と海のつながり体験講座を開催し、24名が受講しました。講師に、香川大学名誉教授 増田拓朗氏を迎え、森の働きをフィールドで体験し、森と海のつながりを学ぶことを目的として開催しました。

座学では、森や海の豊かさとは、多様な植物・動物が生息することであり、そのためには物質生産（光合成）が可能であることと、食物連鎖・物質循環が行われていることが必要であると説明がありました。さらに、河川の流域が荒廃したり、はげ山であれば、森の養分が海に供給されず、光合成を行う植物プランクトンや海藻類は増殖できず、魚介類の育成不良に繋がるというお話がありました。また、「森は海のおふくろ」「森は海の恋人」という言葉を紹介し、森と海はかけがえのない存在であるとお話がありました。受講者たちは時折メモを取るなど真剣な様子でした。

座学の後、森林の保水機能について、2つの実験を行いました。はじめに、森林・草地・裸地の3つのモデルを用意し、散水した水が流出するまでにどれくらいの時間がかかり、どれくらい流出するのかを確認しました。次に、砂と腐葉土が入った2つのペットボトルに水を流し、水がどのように流れるのかを観察しました。実験の結果から、腐葉土のような良い土は水や空気の通りが良く、飽和状態になったところから水がゆっくり流れ出し、砂のような悪い土は地下へしみこまず、水がすぐに流れ出すことが分かりました。



その後、森に入ってフィールドワークを行いました。講師より、ヒノキとスギ、クヌギとアベマキ、サンショウとイヌザンショウといった見分けが付きにくい植物の見分け方を教わりました。受講者は、植物を手にとって観察し、匂いを嗅ぐなどして、その違いを確かめていました。



次に、雨が降った時に森林の果たす役割について、実験を行いました。雨に見立てた水をまき、森林の地表面に用意した受け皿にどれくらいの水が流れるかを実験で確認しました。森林の地表面が受け取る水は、降ってくる雨よりも樹冠から蒸発する（遮断蒸発）分だけ少なく、地表面にはすぐに流れないと解説がありました。次に、森林の保水力を体感してもらえよう、土壌の一面に水をまき、観察しました。受講者たちは森林の保水力にとっても驚いた様子でした。



森林観察を終え、ドングリランドビジターセンターへ戻りました。受講者からは講座の後、「森を歩くことで、森の大切さがわかった」「実験がわかりやすかった」という声がありました。